

佐賀県立博物館報 №41

佐賀市内丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



羽指踊図部分（紙本著色）—肥前国産物図考第4帖より—

ハザシは鯨船の船首にいて、鋸で鯨を突く専任の人のことで、「羽指」「羽差」「羽刺」「刃刺」等の用字がある。「肥前国産物図考」には、「羽指」の字を用いている。この図考の第4帖の末尾に「羽指踊」の情景と下記の解説がある。

- 一、定りて踊るは正月初踊斗也。宮の前にて踊、夫より納屋にて踊り右済て後茶碗にて酒盛をし祝ふ也。
- 一、看板は緋に染め丸の内に金の字を白あかりに大きく後ろに1つ付けるなり。但役羽指4人は明黄裏、若羽さし26人は紅裏也。廣袖にして夜着のこつく仕立る。帯は自分自分の帯故色々也。
- 一、役羽指4人は老人にて有るゆへはだぬかざるもあり。若羽指は残らす両はたをぬぐ也。
- 一、おんど品々有。うた色々有。大鼓打鉦をも打なり。但鉦は鯨供養の意味なり。
- おんど並うた品々あれども其1、2を挙て左にするす。
- △ いは目出たの若松さまよ枝も栄へて葉も茂る。三国一しゃあすはあみに大がけしよ。
- △ 竹になりたやお山の竹に旦那栄へる葉も茂る。三国一しゃあすは網に大がけしよ。
- △ 納屋のろく路に綱くりかけて、子もち巻くのはひまもなや、あすはあみに大がけしよ。

目次

- ・羽指踊……………1
- ・「肥前国産物図考」にみる習俗……………2～15
- ・博物館日誌、行事のお知らせ、当館発行の図録案内……………16

「肥前国産物図考」にみる習俗

「肥前国産物図考」は肥前の唐津領内の海陸の主要産物の生業を絵巻風に描写し解説したもので著作者は唐津藩藩主水野忠任の家臣、木崎俊々軒入道平盛標である。彼は宝暦12年(1762)三河国岡崎城から水野忠任と共に来唐し軍師として仕えた。その間、領内を巡検し捕鯨をはじめ20数件にわたる生業について安永2年(1773年)から天明4年(1784年)まで11年にわたって書かれたものである。現在異本8種端本10種ありあるといわれている。当館蔵は旧富山県新湊、近岡七四郎氏、旧蔵の「富山本」といわれるもので最も完備した折本である。縦26.7センチ、横13.7センチで雲龍模様の紙表紙で、各帖に昔名と帖数を記した題簽がはってあり、各帖着色墨書で全8帖である。その概要は、1帖「肥前国唐津領馬渡島牧並駒捕」と題し、馬渡島の位置、地形の図説がある。「馬事大畧」の記述について「駒捕の次第」として図説が続く。最後に「唐津大渡り川原にて牛馬市之図」があり市場の「定」(正保2年6月2日)写がある。

2帖、「肥前国唐津領馬渡島鹿狩並鷹巢等記」として、鹿狩りの情景がある。つづいて「鹿之図」「ダラノ木図」「鹿笛之図」「雉子之事」「鶯ヲ打ツ図」「鷹之巢」の図説があり最後に「追加」として「地方にて猟師の業ヲ記ス」として猪狩りを図説し「猪鹿荷法ノ図」及び「鉄砲大畧」の記事がある。

3帖、「鵜飼之図」に始まり「諸鵜網の図」「生海風術の図」「長学の図」「鮎魚架の図」「松浦川観取図」で各々の情景が描かれ「掛網の図」では鯉の生捕りの様子を描いている。

4帖、小川島捕鯨に関するもので全長12メートル余全巻を使用した庄巻である。巻頭に「小兒の弄鯨1件の巻序」として、獲鯨図を記した由来をのべ「小川島之図」「小川島山見相図」鯨の網取法の実況、「納屋場」鯨の種類、「捌方」「切捌たる図」「納屋道具」の図説のあと最後に「羽指圖」の絵がある。

5帖、「布晒」と題し唐津村の木綿布をさらす場面と用具を図解し「錫物師」では城下大石村で錫物用具や工場の実況を図説し「線香製」では本町での線香の製造過程を描く。

6帖、「江猪漁事」「江猪網之図」「鮎網の図」「鯛網の図」で唐津湾での網漁の実況を描き最後に「海土」についての説明とその情景を描く。

7帖、「石炭」と「焼物大概」をかなり専門的な立場から図説している。石炭の由来、採掘法などの説明や横穴採掘、搬出、運搬などの情景を描き、「焼物大概」では唐津焼の起源から用具形成までの様子、窯入れ情景などを図説している。

8帖、全紙を通して紙漉についての図説である。「紙漉大概」と「紙漉諸道具大概」の項があり、漉の種類や紙漉の工程などの図説がある。

最後の跋文に「如斯書たれども常に見馴馴染ざる事故相違多からん。鍛錬の人は一笑すべし。是は子の気鬱の徒然を晴さんとのみ、他見の譜を顧ず我が家の小童兒女に与へて習えとする外全く餘義なし。總じて是書に限らず綴所の図書皆同事也。見人人はを思え。

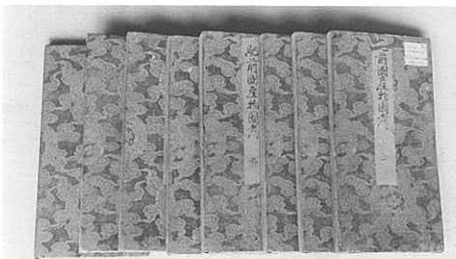
天明四甲辰年、秋7月、肥前唐津城南隠士木崎俊々軒入道盛標、行年73歳」とある。

なおこの図考についての主なる文献は
○牧川鷹之祐「肥前国産物図考」について
佐賀県立図書館だより第58号(昭和43年5月1日刊)
○牧川鷹之祐「肥前国産物絵図」木崎俊々軒の著作に就いて

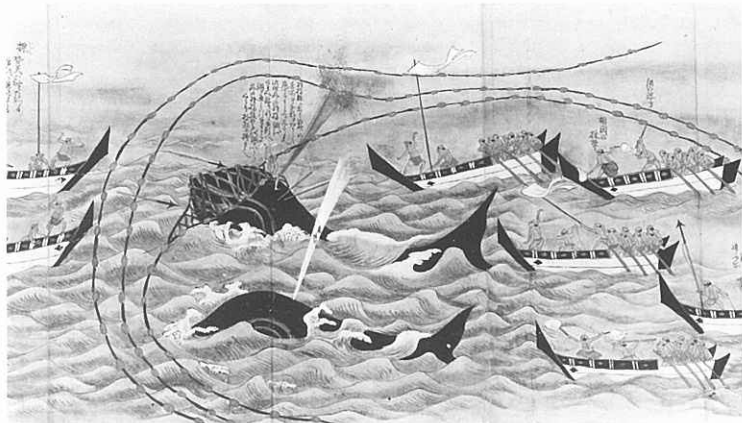
末盧国、創刊号~7号(1962年~1964年)
○槍垣元吉「肥前州産物図考」解題
日本庶民生活史料集成第10巻(1970年 三一書房刊)などがある。

以下、図説から代表的な漁撈、狩猟、生業等についての習俗12件を考察してみる。なおこの中、2、3、4、5は当館の志佐輝彦、8は当館、手塚静雄の稿による。

(学芸課 尾形善郎)



1. 獲 鯨



「肥前国産物図考」の第4帖には小川島を基地とする捕鯨解体の実体が詳細に描かれている。これは著作者、木崎欽々軒が唐津領内を巡検中、玄海の離島小川島で捕鯨の現場にあり、勇猛果敢な漁師の姿に驚嘆して、その情景をつぶさに描いたものである。

当時は、小川島の西側に鯨の見張り場があって、常に2本の旗ぞおが立ててあった。そして玄海付近に出没する鯨（セミ、ザトウ、ナガス、マッコウ、イワシ）などが発見されると、旗ぞおにトマ（竹であんだムシロ）が、かかげられその位置と種類がしらされた。セミクジラの場合は、特にかがり火がたかれて全船団が出漁した。

捕鯨の船団構成は、追船16艘（モリを持つ舟）、双海船6艘（綱をひく船）、付船6艘、ちろり船2艘（綱をもつ船）、持双船4艘（鯨を運ぶ船）など総数40艘で、これにかかわる員数は、羽指、加子、水主、納屋での作業人など総計486人、ほかに鯨のあげ場に数10人の日雇いがいた。

捕鯨は、まず追船が船のふちをたきながら、双海船

の張った綱代へ鯨を追いこんでいくのにはじまる。鯨が綱にかかるとうちにモリを打ちこむ。モリを打つ人を羽指という。弱ったところで羽指の1人が鯨にのりこみ鼻を切り、綱を通す。別の1人が手形を切る。これは羽指が鯨の潮吹き所によって穴をあけることで、そこにも綱を通してあやつる。かくて弱りきった鯨の中央部と腰部に綱を回して、持双船にくくりつけ最期のとどめとして心臓部を剣でつきさすのである。あたり一面は真紅の血で彩られる。こうして、斃死した鯨は持双船にひかれて港に運ばれてくるのである。この間の情景を著作者は、解説を付記しながら軽妙に描いている。

玄界灘は、奥州金華山沖、紀州熊野灘とともに鯨の漁場として有名であった。玄海の捕鯨は近世初頭が始まりで、はじめはモリ突き法であったが、土井時代（1691～1762年）から綱取り法に変わった。本書が書かれたころは、呼子の中尾甚六、唐津の常安九衛門などの鯨組が名をなしており、その名は、大阪近郊までも知れわたっていたという。捕鯨は唐津藩の重要産業の一つとして厚く保護されており、中尾組は明治10年まで8代続いている。



2. 鶺鴒

今日、鶺鴒といえば、近くでは筑後川流域の日田や原鶴などが、温泉郷の夏の夜の風物詩として有名である。

夜のとばりにつつまれた川面に、かがり火をたき、船がこぎ出る。鶺鴒はその船べりに立って10羽から14、5羽の鶺鴒をたくみにあやつり、アユを捕らせるのである。

第3帖には、これらの方法とは多少異なった伊岐佐川（松浦川上流）の鶺鴒の情景が描かれている。昼間、しかも船なしで浅いところに網を張り、それを移動しながら鶺鴒を使う方法である。川下から竹ざおの先端に鶺鴒の羽根か、それに似せた黒ずんだシユロの皮を取りつけた鶺鴒ざおを持った数人が、アユを網へ向かって追い上げ、アユ集めをする。鶺鴒ざおをくぐって逃げ下ったアユを捕える方法としては、ヨモギの類を等間隔に取り付けたツナを両岸近くまで張り、両端を持った2人がこのツナを水中にくぐらせながら、川上の網へ向かって追い進むのである。ツナが水面に浮かび上がらぬように途中には、石のおもりを取り付けている。鶺鴒ざおからやっと逃れたアユも、再びこのツナのおどして上流の網の方へと追いつ

められてゆく。鶺鴒はこの第2陣のツナにつきそってきたアユをのむのである。かくして鶺鴒づかいは、のみ込んだアユを吐かせて捕獲する。

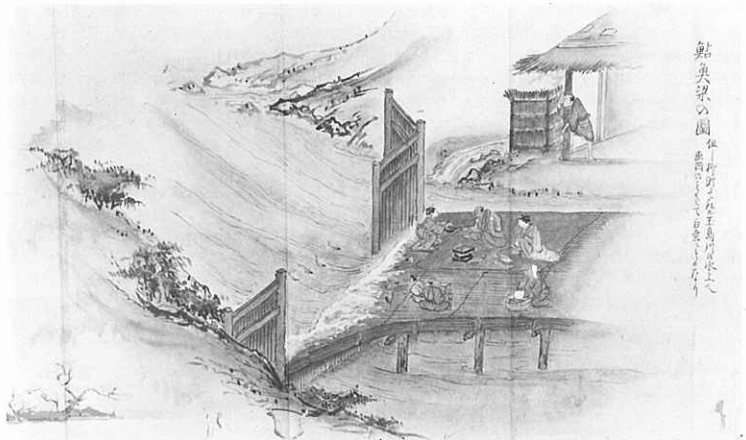
また伊岐佐川や玉島川では、鶺鴒ざおだけを使ってやる独特のアユの捕獲法があったといわれる。9月ごろになると産卵のため川口へ向かって落ちアユが動く。この時期はアユの体長が最大に達し、大きいもので30センチにもなる。このアユを鶺鴒ざおで追うのである。前後左右に逃げまどうアユを鶺鴒ざおを駆使しながら疲れさせ、さしだした鶺鴒ざおのシユロ皮に隠れこんだの手でつかまえる漁法である。

また、古老によると、6、7月ごろ子供たちは、子アユの群を竹で連打しながら浮き上がったアユを捕獲したという。

「肥前国産物図考」には馬渡島での鶺鴒の営巣が描かれているが、伊岐佐の鶺鴒に使われた鶺鴒は、唐津領内の島々にいた海鶺鴒を飼育してアユ漁に用いたとすれば極めて興味深いものである。



3. アユやな



針糸釣りの圖 俗に「アユやな」といふ玉島川上流の七山村柳瀬にありて、昔の人は、小石を敷き、竹を敷き、シロのなわで組み上げたのが「やな」である。古老の話によると、一つの「やな」には約12センチほどの太さの真竹が約20束（1束10本）ほどを必要とした。時期は7、8月が最盛期で30センチもあろうアユが「やな」に踊ったという。柳瀬に伝えられた「やながけ」による漁法は、のちに上流に水力発電所が出来たことなどでアユが減少し、昭和28年を最後に途絶えている。今日では、「やな組み」の技法を知る人も非常に数少ない。

東松浦郡七山村から玉島、浜崎を経て唐津湾にそそぐ清流が古代史の文献にでる松浦河（今日の玉島川）である。

この川のアユは神功皇后が新羅出兵の際、針をまげ、裳の糸を抜いて釣り糸とし、飯粒をエサに「新羅征服に成功し、無事凱旋が可能であれば、魚よ釣り糸をのめ」と念じて釣り糸を投じたところ、アユがかかったという垂輪の伝説が『肥前風土記』にある。

また『万葉集』には、大宰府の官人が玉島川で、アユを釣る少女たちに出会い、『松浦河、河の瀬光り、年魚（あゆ）つると、立たせる妹が裳のすそぬれぬ』とうたったなど古来からアユの産地としてよく知られた川である。

この第3帖に描かれている『アユやな』の図は、庶民的な習俗としてなかなか興味深い。「やな」の簀の上には、赤い毛せんを敷いた客座が設けられ、米遣の客は、婦人をはべらせ、暑い夏の日ひとときを川面に走る冷気に涼をとりながら、アユをサカナに酒をくみかわして

いる。著作者は、このやな場を玉島川上流の七山村柳瀬であると記している。

やな場は兩岸が迫って、川幅が狭くなり、水深が浅く、かつ水の落差が大きいところが選ばれている。

そこでは、川底に二段積みの石列をつくり、その前面にはシロやスギの葉を敷き詰め、小石をのせて押さえとした。それは、魚が逃げ隠れせぬように、また水の流れに乗って下る魚を『やな』の竹の簀の方へスムーズに移動させるためである。

こうして出来た石列を枕に、竹を敷き、シロのなわで組み上げたのが『やな』である。古老の話によると、一つの『やな』には約12センチほどの太さの真竹が約20束（1束10本）ほどを必要とした。時期は7、8月が最盛期で30センチもあろうアユが「やな」に踊ったという。

柳瀬に伝えられた『やながけ』による漁法は、のちに上流に水力発電所が出来たことなどでアユが減少し、昭和28年を最後に途絶えている。今日では、『やな組み』の技法を知る人も非常に数少ない。



4. 海士

海士による潜水漁法は、県内所々にあるが、玄海地方にもその一つがある。

最も古い記録として『魏志倭人伝』に3世紀ごろの唐津とその周辺（末盧国）の記載がある。その一部に『住民は海岸に近い山すそに居住し、好んで魚やアワビを捕獲する。それは水深に関係なく、潜水して取っている。』とあり、海士の源流を伝える意味で興味深い。

この第6帖には玄海地方でのアワビを取る情景が図説されている。それによると海辺の浦々にそれぞれ海士（海女）がいて、モッコフンドシをし、腰にはアワビをおこす鉄製のオコシガネをさして潜水し、アワビを取っている。アワビが見当らなければサザエやナマコを取ったという。

最初に潜水するときは、アワビの殻を数多く持ってゆき、アワビの生息しているところへ目印として配っておく。次いで2度目に潜水するときは、白い殻を頼りに探して捕獲する。多く取るためには海士の技量だけでなく、海士が潜行し浮上する位置を推定して、待機する船頭の

勸と業が大きく物をいう。熟練した船頭であれば、海士が10回潜水するところを10数回ももぐれると記している。

また船には船床（ふねど）といって、船べりに突き出た2本の横木が渡してある。これは、海中から浮上した際、この棒の端に取りすがって休むためのものである。もぐる時はこの船床をつよくけてつこむ。

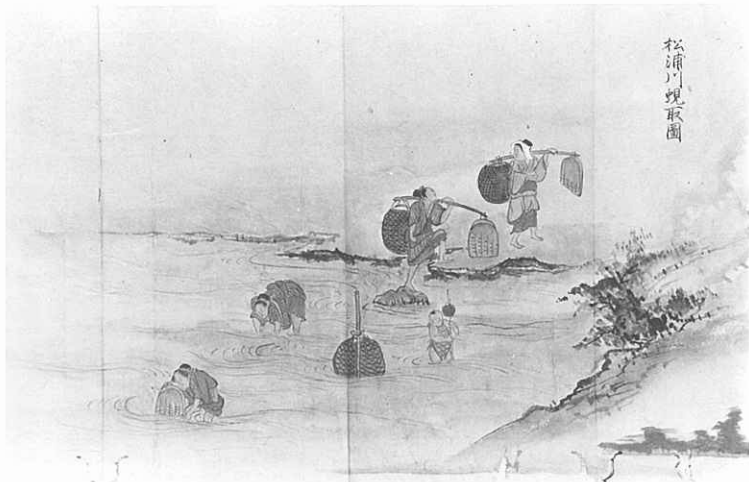
なお潜水に際しては、あらかじめ安全を祈るまじないとしてオコシガネで船床をたたきながらしゅもんをとえ、悪魚をさけるまじないをして海中に入ったという。

こうしたしぐさは今もお伝えされている。

この図には、船に火ばちが据えられている。海から上ると火ばちにかき寄り、冷えた体をドンザにくるんで暖をとっている海士の姿に、往時の海の厳しい生活がひしひしと感じられる。最近は無頼漁法が発達し、大自然の荒磯で育った貝類がわれわれの口から遠ざかっているが、この挿絵にある漁法はまさに古典的な存在ともいえるのである。



5. 蛭取LEA



松浦川蛭取園

貝類は他の鳥獣や魚類に比べて移動性も少なく、容易に捕獲出来たため古代人の好個の食物となっている。

シジミが人々の食糧となったのは古くは縄文時代のことで、貝塚にそれを見ることが出来る。唐津地方では弥生時代（今から約2千年前）、東宇木鶴崎遺跡、宇木渡田遺跡、柏崎遺跡からハマグリ、アカガイ、カキなどに交って淡水性のシジミが多量に検出され、当時、遺跡近くの河川には多数生息していたことがわかる。

この第3帖には、『松浦川蛭取園』がある。ここには、シジミを採り終えたのであろうか、2人の女性が貝を入れた大きな『テボ』と『ザル』を『オウコ』（天秤棒）でかつぎ、話をしながら家路につく情景と、一方、2人の女性と1人の子供がひざまでつかり、腰をまげて『ザル』にかき寄せた砂の中からシジミをえり出している風景がリアルに描かれている。また彼女たちの衣類は麻か木綿で織った平袖の着物と思われる。裾まで割に長く、仕事の時は腰ひもですそを短くたぐって、肩からたすきをかけている。髪は結い上げて一つに束ね、根元をカンザ

シでとめる質素な姿である。江戸時代この地方で働く婦人の姿や服装をよく伝えている。

松浦川のシジミの生息地は先口地区裏の河中にある松浦岩（松浦佐用姫の足跡があると伝えられた巨岩）一帯から上流久里橋にかけて密集していたといわれている。

土地の古老の話では、シジミ採りは松浦川口一帯の農家の副業で、おもに婦女子がそれに当った。百人町、和多田、鬼塚、久里などの地区では仲間同士が誘い合い、連れだってシジミ採りに向かったといわれる。この間の事情は『蛭取の園』と符合している。明治15年の『東松浦郡村誌』には和多田村の産物として『松浦川名産蛭』があって、往時の名声と盛況がしのばれる。

ところで、『シジミはいりませんか』『シジミはいりませんか』の『ふれ売り』の声とともに、唐津市内はもとより、遠く佐志、唐房にまで知られ賞味された『松浦川の蛭』も農業と河川工事や、さらに上流にできた溜止めセキによって内海化し現在では減少の一途をたどっており、唐津の味覚が一つ消えようとしている。

6. 駒 捕 り



馬渡島は、東松浦郡鎮西町に属し、呼子の西南40キロ、船で50分の玄海に浮かぶ周囲14キロの島である。

もともと、この島は平安時代の末、源義俊（源義家の甥で美濃国近江口の領主、馬渡の庄に城を築いていた）が来島し、馬渡島と命名したことから、この島名が起ったといわれる。一方、中国から馬が渡ってきたので、「馬渡りの島」からもいわれる。

この島に牧場が設けられたのは、元和4年（1618）唐津藩主寺沢広高の時代からである。この島は周囲が絶壁で山谷が入り込み、牧草に恵まれているため牧場としては最適である。馬渡遊記（笹本寅）によると、水野時代（1762～1817）藩の直営牧場として石がきの外さくがつくれ、駄役として島民は1日に高さ1間、長さ1間が割り当てられたという。それを怠った者は容赦なく首をはねられたので、宍峠の郷ノ浦へ夜逃げする者が絶えなかったとある。

当時、島を一圍してめぐらされた石がきが現在、各所に残っており、二タ松から川内谷開拓地では馬ならぬ牛の放牧が行なわれている。「牧山」「牧の内」「駒ごめ」「名馬の塚」などの地名や名字は、当時のなごりであろう。



この図考の著作者木崎汝々軒は、唐津に入部してまもなくこの島を検分したと思われる。そして「肥前国唐津領馬渡島馬牧并駒捕」として第1帖に全紙面を通して詳細に図説していることをみると相当期間この島に滞在していたと思われる。

駒捕は例年2月の初卯日と定められている。この日は島の最大の年間行事で、島民はこの日をてぐすねひいて待っていたらしい。島の東部、二タ松一帯は夏牧といわれ、この地区から西へ馬を追って番所辻のふもとから南に折れて冬牧の駒ごめのくは地に追いこんで捕えるのである。冬牧の最南端「名馬塚」の岩礁に追いつめられた若駒で、藩主の指さす名馬を捕えた者には賞金が出されたといわれている。

また、この名馬は岩頭で海の音を聞かせながら藩主のために名馬を育てたことにちなんで名称だともいわれる。現在はここに灯台が備えてある。捕獲された馬は、唐津の牛馬市でせり売りされたらしく、この帖の終わりにその情景が描かれている。

この牧場も明治初年には廃止され、放牧馬はその時、島民に払い下げられた。現在は当時の石がきが散在し、駒捕の状況は伝説化しているにすぎない。

